五代教主作 灰釉茶盌 銘「みろくの春（別名・みちのくの春）」
六盌のうちの一盌
［金竜海土・梅松苑旧機場桃釉］

題字 出口直日

通巻 第５２３号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
（IP）050-5510-9502
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

一人ひとり同じ神業なしと聞く
さればうらまじ人の役目を

出口王仁三郎聖師

「阿づまの光」の名のように

総務管理課主事　藤本　光

去る八月五日、東京本部に再赴任いたしました。皆さまよろしくお願い申し上げます。

私自身、振り返りますと今から二十五年前の昭和六十二年八月、当時の亀岡天恩郷での青年部事務局から東京本部に異動になりました。生まれて初めての大都会の生活に、当初は何かと不安や戸惑いがありましたが、東京本部また関東教区の皆様のおかげで、平成九年三月までの九年半、東京本部でご奉仕させていただきました。以来十五年の歳月を経て再び来させていただき、懐かしい方々に久しぶりに接する機会を与えられたことなど、ありがたいご縁と感謝させていただいているところです。

さて今回、新しい東光苑の門に入った瞬間にまず感じたことは、「以前と変わらない気が流れてる」ということ、また三代教主さまの「東光苑」碑がそのままどっしりと据えられているのに、何か故郷に帰ったように感じました。ご神前には能舞台と、そのほか目にするいろいろな物が、あの頃のまま残されているのに、懐かしさがますますこみ上げてきました。そして当時何を思ってご奉仕をさせていただいたか振り返りますと、「ここは両聖地に次ぐ聖地、今おかれている立場で、精一杯させていただかねば」と、当然のことですが今回もあらためてその気持ちを思い出しました。

大正五年に聖師さまが東上されてから、二度の弾圧・事件解決後には大本東京出張所、昭和二十九年に現在の地に、三代教主さまが大本東京本苑を建設されました。さらに昭和四十三年に東京本部が開設され「東光苑」と命名され現在に至ります。首都は日本の中心で、その動きはまわりに大きな影響を与えること、み教えの光を日本に照らすご神業を強く願われた三代教主さまのお気持ちを忘れてはなりません。「阿づまの光」の名のように、み光を高く掲げるご用に皆さまと共に取り組ませていただきたいと存じます。

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」より

「あの世」を知って生きる

―〝あの世〟と〝この世〟―

講師 森（もり） 良秀（よしひで）
（東京宣教センター次長）

ハイズビィル事件

「人はどこから生まれてきて、何のために生き、そして死んだらどうなるのか？」

私たち人類は長い間この問題について、明確な回答が求められないまま、今日にいたっています。

世の中には霊界を信じる人、そうでない人、双方いらっしゃいますが、現代は科学的にそれを証明する時代にきています。

その一つの大きな契機となったのが、「ハイズビィル事件」です。これは一八四八年、米国ニューヨーク州のハイズビィル村に住むフォックス一家に起こった奇妙な霊的事実談です。

事件が起こる前年、フォックスさん家族はハイズビィル村に引っ越してきました。

間もなくして、家の中に不思議な物音が聞こえてきました。その原因を調べましたが、なかなか解明できません。困りはてていたところ、十一歳のケイトがその物音に対して「私のマネをしてごらん」と声をかけ、テーブルをトントンと叩きました。すると、何もない空間から同じようにトントンとノックが返ってきました。

その様子を見ていた十四歳の姉・マーガレットもテーブルを三回叩くと、同じように三回、また五回叩くと五回返してきました。

母親も不思議に思い、娘を通していろいろと尋ねると、嫁いだ娘や三歳で亡くした末の子をはじめ、家族の構成やそれぞれの年齢まで当てたのです。

そこで近所の人たちも来て、その霊との間で、イエスなら一回、ノーなら二回という取り決めをして交信を続けました。

すると驚くべき結果となりました。自分は、五年前にこの家を訪れたチャールズ・ロズマという行商人で、当時この家の主人ジョン・ベルという男に肉切り包丁で殺され、地下室に埋められたと。霊の身元が判明したのです。

早速村人たちは真偽を確かめるために、地下室を掘り起こしたところ、髪の毛や骨、行商用の鞄などが出てきました。これは当時、大変大きな事件となりました。

このことが契機となり、科学的に霊の存在を研究する、いわゆるスピリチュアリズム（神霊科学）が欧米で盛んになり、今日では、自然科学の世界でも、霊の存在というものを否定しない時代になってきました。

霊体一致

人は必ずこの世を去る時がきます。医学や科学が発展した今日でも、人の寿命を覆すことはできません。私たちは死というものを厳然とした真実として、受け入れなければならないのです。

日本人は、死生観をどのように捉えてきたのでしょうか。日本の伝統文化、能楽・夢幻能の中に、顕幽両界を交通する主人公のシテに死生観を見出していると言われています。

出口王仁三郎は『精霊は人の本体肉体はその精霊の衣なりけり』と、人は精霊（霊魂）と肉体が結合した複合体であると説いています。そして人の「死」とは、肉体から霊魂が離脱した時を言うのです。

肉体と霊魂の関係は霊主体従です。私たちは肉体がすべてを考え、行動していると思っていますが、実は霊魂自身が考え、行動して喜んだり怒ったり悲しんだりしているのです。それらの意志想念が湧き出てくる根本は霊魂にあります。

この肉体と霊魂とは、密接不可分の関係で、この原則を「霊体一致」「相応の理」と教えられています。しかし、霊は時間・空間を超越した霊的法則に従って行動し、体は時間・空間に制限される物質的法則に従って行動するところに大きな違いがあります。

肉体そのものが自分自身であるとすれば、死を迎えたらこの宇宙から全くなくなってしまうという、こんな淋しい悲しいことはありません。

霊魂はなぜ見えないのか？

一般に霊魂は目に見えないので、否定する人が多いですが、〝目に見えないこと〟と〝存在しないこと〟は同一ではありません。

七、八年前私は、築地本願寺の正門で「昼のお星は目に見えぬ、見えぬけれども、あるんだよ、見えないものでもあるんだよ」と大書された掲示板が目に入りました。素晴らしい詩だなと、書き写しました。

昼間の星は肉眼では見ることができませんが、物質的に存在しています。しかし物質的に存在しないものでもあると。これは端的に霊界の存在を説いていると思います。

確かに、目に見えないものは日常生活の中に沢山あります。例えば、心や愛情は、目には見えません。相手に分かってもらうためには、言葉にしたり贈り物などを送るなど、行動行為に表した時に、初めて分かります。

力も目に見えないものです。この〝力〟は動き出した時に、そこに生命力や動力として存在がわかります。

この霊界は、非物質の世界、不可視の世界ですが、私たちの住んでいる所から、全く別の所にあるかというとそうではありません。私たちの肉体の中に、心という目に見えない存在があるように、霊界はこの現界と一体的にあります。

人の死後にいく世界も霊界です。でも死後の世界だけが霊界ではありません。人は、肉体が可視的存在の現界に住んでおり、霊魂は不可視的存在の霊界に住んでいるのです。

霊界、霊魂は目には見えませんが、決して遠い世界のことではなく、私たちの身の内にあるのです。

霊界の三大境域

霊界は大きく分けて「天界」「中有界」「地獄界」の三大境域に分けられます。

まず天界と地獄界の中間に介在する境域が中有界です。現界に生きている私たちにとって、大変重要な示唆を与えてくれます。

中有界は、私たちの精霊が霊界に復活した時に最初に通過する境域です。ここで各自の精霊の善悪正邪真偽が審判されます。

死んだ直後の精霊は、容貌、言語、性情は現界に在った時と少しも変わらないで、外面を装う習慣を持続します。これを外分の情態といいます。当初は自分が死んでいることに気がつかないでいます。

しかし、時間の経過と共に外分は消え去り、本性が現れます。これを内分の情態といいます。自分の内面を暴露されることを恐れる精霊は、いつまでも外面を懸命に飾りますが、内外面の一致という霊界の法則に従い、長くても一年で外分情態は消え去ります。

内分の情態になると、生前の生涯において清く明るく、素直で正直な心の持ち主は、優美で円満な容貌容姿になります。一方、悪慾と偽りの行いをした人は、人相が悪相に変わっていきます。

つまり霊界は真実の心、本心が反映される場所なのです。そういう意味では、大変結構なところの怖い所です。常日ごろから心の持ち方が如何に大切であるかを教えていただけます。

内分の情態を経て、美しく清らかな心を持つ精霊は天界へ行き、醜く我よしの精霊は地獄界へと立て分けられます。

そして天界へ行く精霊のみが、準備の情態へと進みます。準備の情態は、天界の知識を学習するする期間です。

また現界において、極善の精霊は中有界を通らずに、そのまま天界に導かれます。逆に極悪の精霊は中有界の審判なしに、そのまま地獄に頭を下にして真っ逆さまに墜ちて行きます。

このように審判が下されていきますが、神さまは、精霊の悪い分子はできるだけ取り除いて、すべてを天界に救い上げようとしてくださいます。何故なら、人の霊魂は天人夫婦の間に生まれた霊子が成長したもので、元々神の子だからです。

しかし名刀と言われる立派な刀であっても、曲がったり折れたりしたら、元の鞘（さや）に納まらないように、どんなに素晴らしい霊魂であっても歪んだり傷がついたら、元の霊界の席には戻れません。傷ついたところを埋めてでも天国へ救い上げてやりたいというのが、神さまの慈悲の御心であり、神ごころなのです。

天界は愛善と信真の世界で、熱と光にあふれる世界です。あの人は、〝心のあたたかい人だ〟とか、〝物事に明るい人だ〟と評したりしますが、まさにその人は天国的な霊魂の持ち主であるといえます。

王仁三郎は、天国天人は『優美円満で若々しく、男は三十歳くらい、女は二十歳くらいの容貌、容姿で老衰することはない』と示しています。

地獄界は「根の国底の国」とも言い、虚偽と悪慾の世界です。悪と欲と虚偽に呆けた悪霊・邪気、夜叉などの妖怪の集まる境域です。

『ことさらに神は地獄をつくらねど己が造りて己が行くなり』　（王仁三郎歌）

地獄とは悪いことをした人間を懲らしめるために、神さまが事前に作られた境域ではありません。

悪いことをしたから、地獄に叩き落すのではなく、むしろ自ら進んでいく霊魂の集まるところです。地獄行きの霊魂にとっては、愛善・信真の天界はむしろ地獄なのです。

例えばウジ虫を捕まえて、〝こちらの方が快適だよ〟と、清潔な場所に移しても、ウジ虫にとってはその方が地獄です。

しかし、霊魂は本来神の子ですから、間違っていたと、心から悔い改めることができると、一条の光が射して、中有界、さらに天界に上がる霊魂もあります。

死は霊界への復活

家族や友人、知人の死は大変悲しいことです。しかし、あくまでも人の死は、人間の進化の一つに過ぎません。

それは、赤ちゃんがお母さんから産まれてくる時に、胞衣（えな）を残して現界に産まれてくるように、人は肉体を現界に残して、霊魂は次の霊界へ進んでいくのです。

霊界から見ればそれは死ではなく、まさに復活なのです。

前述の通り、天人夫婦の間に産まれた霊子は天国で育つのではなく、必ず現界の因縁の夫婦の間にその霊子が授けられ、肉体が成長するとともに、霊魂も切磋琢磨して向上していきます。現界はこの意味で霊魂の修行場であると言えます。

このように成長した霊魂は、肉体から離脱しても、生前の意志、想念、感情を持ち続けて、霊界で働きを続けます。故に、霊魂は不滅なのです。

霊界観をもって現実的努力を

霊界と現界の違いに『同気相もとむるの理』という法則があります。

今私たちの住む現界は、様々な意志想念を持った、性格の異なる人たちが一緒に生活しています。

しかし霊界では、意志想念を等しくする者のみが寄り集まって一同に生活します。つまり余計なものが混じりこむことはありません。宗教や思想、趣味、性格が異なれば、霊界では一緒にはならないのです。

天界にも、キリスト教、仏教、イスラムなど、現界と同様にさまざまな宗教および団体が存在します。同じ宗教の信仰を持つ者であっても、その信仰度の高低によって同じ団体に属することはありません。

ですから団体内の争いが全く起こりません。全員が神さまの下に、同じ思想であり同一の価値観だからです。でも魂の向上は容易ではないようです。

現界にはいろいろな考えを持つ人がいて、ある時は馬鹿にされたり、嫌な思いを受けたりすることがあります。しかし自分自身に対して〝負けてたまるか！〟といった克己心が生まれます。それによって現界での霊魂の向上は図ることができるのです。

このように霊界の存在を知って、はじめて神さまの摂理の尊さや人生の意義が明らかになるわけです。人生を確立することは、霊界観をしっかり持つことです。

ただし、気をつけていただきたいのは、霊界について理解を深めることは重要ですが、現界はあくまでも物質的法則で支配された世界ですから、現実的な努力を忘れてはなりません。霊界を知って現界を生きる意味は、まさにそこにあるのです。

東光苑月次祭

東光苑月次祭並びに秋季合同慰霊祭は九月九日、午前十時三十分から、斎主・森良秀東京宣教センター次長のもと執行され、三百六十人が参拝した。

祭員は関東教区各主会青松会員、少年少女祭員は山梨主会の小池翔音くん、礼音さん兄妹、伶人は宮咩会関東支部、大本神論拝読は野田榮神奈川主会青松会長、添釜は宇野社中のみなさんが担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、来年一月に開催される『出口王仁三郎とその一門の作品展』が東京都の後援名義が正式に承認されたことを報告したほか、宣教センター時代を迎えた今日的意義を解説。「芸術を通しての宣教活動、東京宣教センターでの『常設対外講座』、主会での『大本紹介講座』、分所支部での『生きがい講座』に有縁の方をご案内・お伝えしなければならない」と力説した。

次いで高野清埼玉主会青年部長が、八月十三日から十五日の三日間、聖地・天恩郷で開催された「開教百二十年慶祝大本青少年祭」の参加と奉納種目の成績を報告。

引き続いて「長寿祝式典」に移り、まず出席者十八人を紹介したのち、鈴木花枝直心会神奈川連合会長から、佐橋妹須子氏に記念品が贈呈された。

続いて鈴木同連合会長から祝辞が述べられ、最後に角田良彦氏が出席者を代表して答辞を述べた。

なお本年度、関東教区では白寿二人、米寿に二十一人、喜寿に三十六人の方々が迎えられた。

当日列席者＝米寿／勢村みさを・飯野みさ子・中川富美江（神奈川）、喜寿／蔀トシイ（福島）久保田茂子（群馬）飯田啓子・福永よし（茨城）佐橋妹須子・石井正江（埼玉）佐野恵美（千葉）角田良彦・島田邦光・萩原よね・村井和子・貴堂悦子・阿部芳子（東京）立石晴夫・古山正治・中村静子（神奈川）

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第百十五回大本公開講座『出口なお・出口王仁三郎の世界を語る』は、九月十九日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において、浅田秋彦東京宣教センター長を講師に「芸術は宗教の母なり―宗教即生活即芸術―」と題して開催された。参加者は二十一人（内、一般七人）。

講座では、大本の芸術観や歴代教主の作品の特色などを解説したほか、それら作品を通じて始まった海外作品展と宗際化活動について紹介した。「神の経綸は現代を立替え立て直して、真・善・美に輝く〝みろくの世〟の実現が、今まさに迫ってきている」と説いた。

出口王仁三郎とその一門の作品展
魂の煌めき～耀盌と書画～

大本東京本部・東京宣教センターでは、大本開教１２０年を慶祝し、来る平成２５年１月６日から１２日までの日程で「出口王仁三郎とその一門の作品展」を開催いたします。首都東京で歴代教主・教主補さまのお作品が一堂に展示されるのは開教以来初めてのこと。この機会にぜひ知人・友人お誘い合わせの上、ご来場ください。

開催期間　平成２５年１月６日（日）～１月１２日（土）
１０：００～１９：００（入館は閉館の３０分前まで）

会　　場　北とぴあ・地下１階展示ホール
（東京都北区王子１―１１―１）
ＪＲ京浜東北線王子駅北口より徒歩２分
東京メトロ南北線王子駅５番出口に直結

主　　催　「出口王仁三郎とその一門の作品展」実行委員会

後　　援　東京都・産経新聞社

入場無料

東京本部主催 祭典・行事予定

10月〔クリーン月間〕

14日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

17日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題　今求められる食・農・環境
―今こそ、お土のこころを―
講師　島本光久（[社]愛善みずほ会理事）

18日（木）午後7時
第45回霊界物語全国一斉拝読会

20日（土）午前10時30分
第21回家庭平安祈願祭

11月

4日（日）午前10時30分
開教120年大本開祖大祭遥拝祭

11日（日）午前10時30分
開教120年東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣り（教主さまご臨席）

21日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題　人は何のために生きるのか
―人生にとって大切なもの―
講師　森良秀（東京宣教センター次長）

23日（金・勤労感謝の日）
全国人型おすすめ活動日